

A Discourse Analysis of Japanese EFL Learner' Production of Referential Expressions in Written English Narratives (物語にみる日本人英 語学習者の指示表現産出の談話分析)

著者	猪井 新一
号	14
学位授与番号	95
URL	http://hdl.handle.net/10097/42642

氏名（本籍地）	猪井 新一
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	学術（情）博 第 95 号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学位論文題目	A Discourse Analysis of Japanese EFL Learners' Production of Referential Expressions in Written English Narratives (物語にみる日本人英語学習者の指示表現産出の談話分析)
論文審査委員	（主査）東北大学教授 福地 肇 東北大学教授 岩崎 祥一 東北大学准教授 菊地 朗 東北大学准教授 小川 芳樹 東北大学准教授 西田 光一

論文内容の要旨

第 1 章 序論

これまでの第二言語習得(SLA)研究は主に学習者の語彙、文法形態素、統語構造等の習得に着目してきた(Larsen-Freeman, 1980; Ellis, 1994)。しかし、国際化時代の到来とともに、第二言語教育において学習者のコミュニケーション能力の養成が叫ばれ、そのためディスコース(談話)レベルを考慮した第二言語教育がますます重要となってきた。そのため、SLA 研究はその研究範囲をコンテキストを考慮した談話分析へ広げるようになった。本研究は SLA における談話分析の中でも、テキストの結束性(Cohesion)に密接に関わる指示表現の産出に着目する。本研究の主たる目的は以下の 2 つである。

- 1)日本人英語学習者は物語のようなひとまとまりの談話を産出する際に、登場人物をどのような指示表現を用いて言及するのかについて、その特徴を文レベルのみならず談話レベルにおいて、記述・分析し日本人英語学習者の指示表現産出プロセスを解明することである。
- 2)日本人英語学習者の英語力と英語指示表現産出には何らかの関係があるのか否かについて調査することである。

第 2 章 先行研究

指示表現に関する先行研究のうちから主に英語や日本語の第一言語に関するもの(Hinds, 1977, 1983; Clancy, 1980; Givón, 1983a, 1983b, 1984; Morrow, 1985; Fox, 1987; Obana, 2003)等と、第二言語学習者言語に関するもの(Karmiloff-Smith, 1985; Williams, 1989; Chaudron & Parker, 1990; Inoi, 1991, 1993, 1997; Tanimura, 2003)等を取り上げ、本研究との関わりについて論じた。

第一言語の指示表現研究は 2 つに大別でき、一つは Givón に代表される量的研究であり、指示表現とその指示対象物(Antecedent)との距離(Referential distance)から説明しようとするものである。距離は節(Clause)の数により測定され、距離が長いと指示表現として定名詞句が使用され、距離が短ければ代名詞、ゼロ照応詞が使用される傾向にある(Topic continuity)。もう一つは Fox(1987)に代表される質的研究であり、談話構造や情報の重要性から登場人物の指示表現を説明

しようとする。例えば、ある同じ場面が継続する場合には代名詞が使用され、一方、場面の变化がある場合には代名詞ではなく定名詞句が用いられる傾向にある。第二言語学習者言語に関する研究からは、指示表現産出は学習者の母語の影響を受けやすいこと、代名詞ではなく名詞句を反復しやすいこと、主語脱落が生じやすいこと等が報告されている。さらに、Givón の Topic continuity を支持するような研究報告もある(Williams, 1989)。以上のような先行研究の成果をふまえ、本研究は日本人英語学習者および英語母語話者産出の指示表現においてどのような特徴が観察できるかについて第4章～第6章で論じた。

第3章 実験方法

本研究の被験者は日本人英語学習者 39 名、英語母語話者 9 名、合計 48 名である。被験者に 4 コマの絵を与え、日本人英語学習者からは日本語および英語により、英語母語話者からは英語によりひとまとまりの文字テキストを産出してもらった。

日本人英語学習者に Cloze test を実施し、正解率が 70%以上の 13 名を高学力グループ、正解率 50%未満 11 名を低学力グループとし、英語力の異なる 2 グループを設けた。

第4章 英語母語話者の英語テキスト分析

英語母語話者の英語テキストにみられる指示表現を量的・質的に分析した。分析言語項目はゼロ照応詞、定名詞句、三人称代名詞、裸名詞である。量的分析は指示表現の数・比率、Referential distance の観点から行なった。三人称代名詞が一番頻繁に産出され、次に定名詞句が続き、この両方で全体の 8 割を占めた。ゼロ照応詞の産出はさほど多くはなく、裸名詞の産出は極めて限定的であった。Referential distance は定名詞句の場合が一番長く、次に代名詞、ゼロ照応詞が一番短い結果となった。本研究のデータが文字テキストであるにも拘わらず、この結果は Clancy(1980)の音声データ分析結果とほぼ一致している。英語母語話者の指示表現の選択は Referential distance が重要な決定要因であることを検証しており、Givón の Topic continuity を支持する結果となった。

質的分析からは以下の 7 つの特徴に言及した。1)ゼロ照応詞の使用は限定的で、登場人物の一連の行動を表す際に用いられ、Clause 間に意味的な結束性(Cohesion)を与えていた。2)登場人物を物語の中に導入する際には“the”のついた定名詞句が使用された。これは一般的知識に基づいた間接照応である。3)同一の登場人物を連続して言及する場合は、2 度目は三人称代名詞が頻繁に用いられた。4)集合名詞としての“the family”を登場人物とみなし、Referential distance が大きい場合でも“they”が用いられるのは、“the family”が物語の中で主人公的役割を演じているためである。5)英語母語話者の産出テキストが短いため、場面の变化に応じて指示表現が変化するというような傾向は観察されなかった。6)同一の登場人物に言及する際に、異なる名詞表現を用いる傾向が見られた。7)裸名詞の産出があり、その産出理由について言及したが、英語において裸名詞使用は非標準的であるとの批判についても述べた。

第5章 日本人英語学習者の日本語テキスト分析

日本人英語学習者の日本語テキストにみられる指示表現を量的・質的に分析した。量的分析からは裸名詞およびゼロ照応詞の産出が顕著であり、全体の産出指示表現数の 9 割を占めた。日本

語指示表現(裸名詞、ゼロ照応詞、指示形容詞句、数量詞)の Referential distance はゼロ照応詞を除き大差はなく、Referential distance が日本語指示表現選択の決定的要因ではないことを論じた。質的分析からは次の 7 つの特徴を論じた。1) 三人称代名詞は全く産出されなかった。2) 個々の登場人物に言及する際には裸名詞が頻繁に使用される一方、家族全体に言及する場合は「その」のような指示辞がつく場合があり個人差が見られた。3) 同一登場人物を連続して言及する場合、2 度目はゼロ照応詞が使用された。4) 英語テキスト同様に、集合体としての「家族」が物語の主人公的役割を演じており、ゼロ照応詞が使用される場合があると論じた。5) 英語テキスト同様に、ゼロ照応詞は同一の登場人物の一連の行動を表す際に用いられた。6) 場面の変化が時として明示的指示表現の使用を促すこともあったが、個人差も観察された。7) ゼロ照応詞の使用は統語的には英語ほどは制限がなかった。

第 6 章 日本人英語学習者の英語テキスト分析

日本人英語学習者の英語指示表現を量的・質的に分析し、第 4 章及び第 5 章の分析結果と比較した。量的分析からは、裸名詞、代名詞が頻繁に産出されており、その次に定名詞句が続いた。英語母語話者の指示表現と比較をすると、次のような相違点が観察された。1) 日本人英語学習者は裸名詞を多用したが、英語母語話者は代名詞を多用した。2) 日本人英語学習者の代名詞、定名詞句、ゼロ照応詞の産出率は英語母語話者よりかなり下回った。3) 日本人英語学習者は“a”のついた不定名詞句を産出したが、英語母語話者は全く産出しなかった。4) 日本人英語学習者の裸名詞の産出率は英語母語話者の産出率よりはるかに上回った。類似点は日本人英語学習者および英語母語話者とも代名詞の産出において“they”が最も頻繁に産出されたことである。これは“they”が使用される言語的環境が共通していたことによると思われる。

日本人英語学習者の L2 英語指示表現を L1 日本語指示表現と比較した。相違点は次の通りである。1) 三人称代名詞は L1 では全く産出されなかったが、L2 では裸名詞に次いで多く産出された。2) ゼロ照応詞は L1 において頻繁に産出されたが、L2 ではほとんど産出されなかった。類似点は L1・L2 間で 1) 裸名詞の産出率がほぼ同じであること、2) 指示表現及び Clause の産出率がほぼ同じであることである。以上から、L1 および L2 の指示表現産出プロセスはある側面では似ているが、別な側面では異なることを示していることがわかる。

L2 指示表現の Referential distance はゼロ照応詞を除き、裸名詞、定名詞句、代名詞、不定名詞句の平均値に大差がなく、日本人英語学習者の英語指示表現の選択において、Referential distance が決定的要因でないことを示している。これは Givón の Topic continuity を支持する結果となっていない。むしろ、L2 指示表現の Referential distance の値は L1 指示表現の値と大差がなく、日本人英語学習者は L1 を土台として L2 指示表現を産出しているのがわかる。言い換えれば、母語の干渉が生じているのである。

質的分析からは、裸名詞の多用、同一名詞句の反復が顕著であり、これを母語干渉、単純化方略、One-to-one principle の 3 つの要因から説明した。一方、日本語データにはない三人称代名詞“they”が頻繁に産出されたこと及び主語要素の脱落が観察されなかったこと(ゼロ照応詞の不使用)は、日本人英語学習の英文法についての知識 (Metacognitive knowledge) が機能しているためと説明した。

日本人英語学習者の英語指示表現を学習者の英語力から分析したところ、上位グループと下位

グループ間では三人称代名詞、定名詞句、裸名詞の産出の頻度に関し統計的有意差は見られなかった。また、Inoi(1993)で観察されたような下位グループほど同一名詞句を反復するという傾向も顕著には見られなかった。これらの結果は、日本人英語学習者は英語力に関わらず L2 裸名詞を過度に産出していること、被験者が少数であること、第3章でふれた Cloze test では十分に被験者の英語力を測定していない可能性があることの3つの要因によるのもであると論じた。裸名詞の産出が上位グループでも顕著な特徴であり、言語形式と意味との一対一の関連付けが極めて強く機能していること(特に家族の個々のメンバーに言及する場合)、定冠詞“the”は日本人英語学習者にとって極めて習得困難な言語項目の一つであることが原因であると論じた。

第7章 結論

本研究は第二言語(外国語)教授に次のような示唆を含むものである。1)母語干渉は談話レベルで起きやすいものであるから、教師は文レベルのみならず談話レベルにおける指導にも着目すべきである。2)物語産出は日本人英語学習者に冠詞や代名詞のような言語項目を指導するには有効な手段である。

論文審査結果の要旨

前方照応体系の中に位置づけられる代名詞を含む指示表現の生起のしかたは、普遍文法を考える上で重要な構成要因であるとともに、個別文法の記述においては豊かな多様性を提供する言語現象である。これは、同時に、外国語教育の理論と実践においても大きな課題を提供する。本論文は、日本人の英語学習者による前方照応的指示表現の実態を分析することにより普遍的言語能力と母語知識の干渉に関する解明を行うとともに、日本人に対する英語教育への貢献を目指そうとしたもので、全編7章から成る。

第1章は序論であり、本研究の背景と目的を述べている。

第2章は、この分野における先行研究を概観し、先行詞と指示表現の間に介在する量的および質的要因を抽出して本論文での分析手段とすることを論じている。

第3章では、本研究でおこなった、日本人英語学習者と英語母語話者を被験者とする実験および調査の方法を述べている。

第4章では、英語母語話者による英語テキスト創作作業における指示表現産出の状況を、ゼロ照応形、定名詞句、人称代名詞、同一名詞句、裸名詞の形式に基づいて分析し、指示表現の選択には先行詞・支持表現の間の距離が大きな要因になることを明らかにしている。これは、Givon (1984) の「話題継続の原則」を実験的に確認した点で、貴重な知見である。

第5章では、日本人英語学習者による日本語テキスト創作過程における指示表現産出の状況を分析している。ここでは、ゼロ照応表現および裸名詞の産出が指示表現全体の9割以上を占めていることが報告され、日本語においては先行詞・指示表現間の距離はほとんど意義をもたないことが明らかにされている。これは、日本語における指示表現使用の実態を明らかにしているとともに、記述言語学的に、日本語の照応表現体系を修正する必要性を示唆している点で意義がある。

第6章では、日本人英語学習者による英語テキスト創作作業に見られた指示表現産出の状況を分析している。この作業においては、第5章の結果と同じく、ゼロ照応表現と裸名詞の産出がきわめて優勢で、同一名詞句の使用も目立つという観察に基づき、第2言語学習における母語知識の干渉が著しいことが述べられている。これは、重要な指摘である。

第7章は、結論および、指示表現習得がもつ外国語学習・外国語教育への関わりを述べている。

以上要するに、本論文は、日本人英語学習者の指示表現産出能力を、英語母語話者のそれを含めて、実験的に分析したもので、言語学、外国語教育学を含む情報科学の学際分野の進展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は、博士（学術）の学位論文として合格と認める。